

食いしん坊の私が料理を編み始めて、20年になる。名付けて「毛糸料理」。鯛やウニのお鮓、スズキの香草焼、フルーツケーキ

編んだかき氷(写真右)と焼き魚(写真下)



時間を見つけて、京都や大阪、東京の手芸店に毛糸を探しに行く。眺めているうちに、「これは焼」編んでは眺め、眺めては「次郎」の鮓の写真を収めた本が送られてきた。本

小岩井乳業出向

「おまえには生業がない。同年代の技術者は新工場の技術導入で主導的な役割を果たしている。一人前のビールの技術者にならないぞ。俺の所

私の履歴書

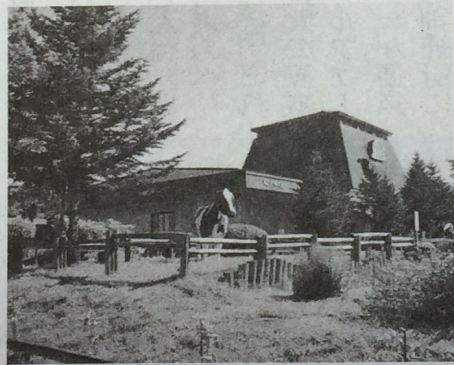
荒 蒔 康 一 郎

20

赴任当初はよそ者扱い

信頼積み重ねトラブル解決

をやれと言われてもできない」と思っていたので気落ちはしなかった。ただ入社のはじめはしななかった。ただ入社



小岩井乳業の小岩井工場 (岩手県雫石町)

し静かな廊下に出る。「年明けから小岩井乳業に出向してくれ。おまえの希望だろ」。確かにそうだが、今の仕事はまだ半年もしていない。「新しいバター製造ラインがうまく稼働しない。小岩井からトラブル処理の人をよこせと言ってくる」。稼働率がな

に「来い」。1978年(昭和53年)7月に帰国すると、留学を認めてくれた片岡純一郎さんにきつく言われた。38歳。ビールの生産技術を担当する製造部技術課に配属となる。

その年の忘年会で会社人生で大きな節目となる出来事があった。「話がある。ちょっと来い」と片岡さんが声を掛けてきた。「また怒られるのかな」と思った。座敷から少

製造課長に話を聞くと「工場長に聞いてくれ」。工場長は「製造課長に聞いてくれ」と堂々巡り。製造課長に「なに

つづけてくるようになってきた。工場内の人脈も広がると、トラブルの解決策も見えてきた。

米国で乳酸菌の研究をしたから、立ち上げたばかりの小岩井乳業への出向を希望して

現場で通用するほど甘くはない。79年1月、辞令が出た。肩書は技術管理室長。社長からはこうクギを刺される。「君の仕事はあくまでも新ライン

か資料はありませんか」と聞くこと「個人的なメモだからお見せすることはできない」。完全にスパイ扱いだ。

半年ほどでトラブルは完全に解決。その年の「小岩井」ブランドのギフトセットの製造に間に合わせることができた。(キリンビール元社長)

大丸 00 貨店 時代 飲お 冗談 を上 コー 出 ル社 91 スト 奥田 商品 扱っ く、 ルボ に呼 なが た。